

はじめに、3月11日に発生した日本観測史上最大の地震「東日本大震災」により、被災された方々に改めましてお見舞い申し上げます。また、災害現場にて復興作業に尽力されている方々に感謝致します。

震災当日、災害発生をテレビの報道で知ることとなりました。目を覆いたくなるような惨状が、容赦なく目に飛び込んできました。これが本当に日本で起こっている出来事なのかと、驚くべき事実にただ呆然としていました。天災は忘れたところにやってくる。まさにその通りで、自然の猛威を思い知らされました。

災害発生から半年余りが経ち、あの衝撃が薄れつつあります。余震、原発問題、計画停電、行政の対応など、以前は毎日ニュースで取り上げられていましたが、時間とともに報道が少なくなってきました。短期的に盛り上がり、しばらくしてブームが去るように支援が途切れてしまっは意味がありません。

遠い地で何の手助けも出来ず、祈ることとわずかな義援金だけしか出来ない自分がこんな偉そうなことを言える立場ではありませんが、あわてて支援をやりきってしまうのではなく、継続して支援することが大事だと思います。そのような思いから今回の宮城支部慰問に同行させていただくこととなりました。行程やスケジュールの詳細は既に記載されていることとしますので、簡単に記させていただきます。

8日（土）午前2時30分に出発し、約12時間かけ宮城県名取市の村上師範のご自宅に到着しました。村上師範が「秦師範、よく来てくれましたね」と涙ながらに熱い抱擁を交わされました。自分も胸が熱くなり、感動的なシーンでした。そしてご自宅にて震災の時の様子などを話して頂きました。休憩する間もなく、被害の大きかった閑上地区に案内して頂きました。テレビなどで被害の状況を何度も見ているはずなのに、想像をはるかに超える悲惨な光景に言葉を失ってしまいました。陸にうち上げられている漁船、基礎部分しか残っていない家屋の数々・・・地域が根こそぎ剥がされ、壊滅的な街並みを目の前にし、絶望的な気持ちになりました。日常生活に突如として襲ってきた大津波によって、その生活の全てを失ってしまった住民の方のことを思うと本当にいたたまれなくなりました。

そして道場に移動し、村上師範の指導の下、宮城支部道場生とともに稽古に参加させていただきました。村上師範の少年部を見つめる目はとても優しく、愛情に溢れていました。長時間の運転で疲れていましたが、心地よい汗をかかせていただきました。

稽古終了後、義援金や激励メッセージを綴った寄せ書きの色紙を贈呈しました。

その後、村上師範を交えて震災のときのエピソードなどのお話を聞きながら食事をしました。当事者でもない自分が軽々しく言葉を発するのは失礼かと思い、ただ「押忍、押忍」とこみ上げる涙を堪えながら頷くだけでした。

そして別れを惜しみながら私たちは、スーパー銭湯で仮眠をとり、その日の夜中、帰路に就きました。

短い時間ではありましたが本当に有意義な時間を過ごさせていただきました。村上師範、お忙しい中色々とお世話になり、ありがとうございました。

現地に行き、自分の足で歩き、見て聞いて、感じたことや考えたことをみんなに伝え、我々の教訓にしなければいけないと思います。それが被災された方々に対して新たな支援の第一歩になると思います。

震災前の日常に戻れるにはまだまだ支援や時間が必要ですが、一日でも早い復興と皆様の笑顔が戻りますよう心からお祈り申し上げます。

乱筆乱文失礼致しました。押忍。

宇陀支部長 中西庄司